

(郷土) 大樹寺小学校 4年

家康ってどんな人？ ～遺訓から探ろう 家康のメッセージ～

4月～ 3月(60時間)

1 本校が定める第4学年のめざす子どもの姿

- ・家康の一生や遺訓から、家康の生き方や考え方を知り、自分と比較して考えたり、共感や憧れの気持ちをもったりすることができる。【学ぶ子】
- ・家康の生き方から、我慢強さの大切さを感じ取り、自分にも取り入れようとする。【がまんする子】
- ・自立の誓いをたて、振り返り、見直しする活動を通して、よりよい集団をつくる一人として、物事を人任せにせず、自分のよさを他人のために発揮することができるようになる。【がまんする子】
- ・友達の考えを自分の考えと比べながら聞き、そのよさや違いを認めることができる。【やさしい子】



2 実践の概要

本校は昔の大樹寺の敷地内に校舎があるという立地から、毎月23日の「自立の日」や家康、祖洞和尚にちなんだ運動会の演技・競技などが行われている。そのため、子どもたちにとって家康は比較的なじみのある存在である。しかし、その人物像や生涯についてはまだまだ知らないことが多い。そこで、これまで無意識のうちに知った家康や家康にかかわる人やもの・ことを改めて調べなおし、考える機会をもつことで、自分を見つめ直し、今後の自分の生活に生かそうと努力する子どもたちになることを願い単元を設定した。

(手立て1) 遺訓から人柄を探る～家康ってどんな人？～

ふるさと探検(岡崎城の見学)や運動会を振り返る話し合いを通して、大樹寺や家康とのかかわりの深さに気づいた子どもたち。付箋を使って、今まで自然のうちに身につけてきた徳川家康についての知識を振り返る活動を通して、今の自分の知識量を把握させた【写真①】。その上で、遺訓から家康の人柄を探る授業を行った。まず、当たり前前に唱えている遺訓の意味を現代語に簡単に訳した。単に意味を押さえていくのではなく、できるだけ子どもたちが意味を受け取りやすいように、やさしい言葉に話し合いながら置き換えて行った。「ああ、そういう意味だったのか。」と運動会で何十回と唱えていた男子でさえも言っていた。



写真① 付箋で知識把握

その後、遺訓から家康がどんな人だったか探るかかわり合いの時間を設けた。導入では、運動会3、4年男子の演技をビデオで振り返り、その中の遺訓の暗の場面が来ると、クラス全員で遺訓を暗唱した。

その後、課題を確認して、前回作った現代語訳を原文の横に書き込んだワークシート【写真②】に、気がついたことや発見したことに線を引き、短い言葉でメモをしていった。



写真② ワークシート

かかわり合いで、子どもたちの意識が集中したのは、「不自由を常と思えば不足なし」という一文と、「勝つことばかり知りて負くることを知らざれば 害その身に至る」という文である。「不自由を常と思えば不足なし」のところでは、「家康は人質でやりたいことができなかつたから、当たり前にながまんしていたと思う。」「人質で辛かったことを思い出していた」など、家康が幼少時代、人質生活をしていた話など、ふるさと探検で得た知識を基にして、発言をしていた【写真③】。



写真③ 授業のようす

話し合いを進めていくと、たくさんの意見が出たものの、子どもたちは家康の人柄についての意見ではな

く、遺訓の意味の解釈に留まっていた。そして、家康の生涯を知らないため、根拠をもって家康はこんな性格だと言えるものが少ないということが見えてきた【写真④】。そこで、家康のことをもっと調べていくことになった。方法を考えてみると、本やインターネットの他に、「大樹寺が近くにあるから、見学に行けば、家康のことが分かるかも」という発言が出て、大樹寺の見学へ行くことにした。



写真④ 板書

(手立て2) 家康人生すごろくを作ろう

クラスですごろく遊びが流行っていた子がいたこともあり、家康の人生を調べたことを、「人生ゲーム」のように、立体で人生すごろくにまとめていくことになった。すごろくのマスを作るために、家康の一生を詳しく知る必然性が生まれた。

いただいた冊子を中心に、伝記などの本、インターネットを使って個人追究を行った。進めるマスや戻るマス、アイテムマスなどを作るために、家康の人生の転機になる話、良い話だけでなく、失敗した話など、家康を多方面で調べることに繋がった。調べたことを付箋を使って、色分けしながら整理していった。また、個々が追究したことを、かかわり合いの時間を設け、全体で共通化した。時代を区切って、エピソードとすごろくにするイメージがもてない子も、子どもたちの意見をまとめたものをマスにすることですごろく制作の見通しをもたせた【写真⑤】。



写真⑤ 全体で共有

個人追究だけでなく、家康についてのエピソードをいくつか紹介し、かかわり合いの場を設定して、知識を深めていった。

調べていく中で、母と別れて生活していたこと、辛い人質生活の中でも鷹狩りなど比較的自由があったこと、自分の妻や子供を殺さなければならなかったことなど、様々なエピソードを知ることができた。また、鳥居強右衛門や徳川四天王など多くの人たちに支えていたことを知り、すごろく作りに取り入れる子もいた。

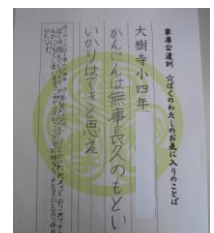
すごろくの制作に入っても、マスを並べてみたり、遊んでみたりする中で、友達と意見を交流し、改良を加えながら制作を進めている【写真⑥】。



写真⑥ 家康人生すごろく

上記の2つの手立ての他にも、めざす大樹寺っ子の育成を目指して、子どもの実態に合わせて修正を加えながら以下のような手立てを試みた。

- ・自作の家康にまつわる道徳教材を作成し、実践
- ・自分と家康とのかかわりを意識して、家康公作文を書く
- ・家康学習を振り返り、遺訓に込められた家康のメッセージを考える
- ・これからの自分に生かしたい遺訓のことばの視写【写真⑦】



写真⑦ 遺訓視写

3 実践を振り返って

実践の途中であり、今後、遺訓からのメッセージをふまえて、1/2成人式を行っていく予定である。歴史的な背景がわからない4年生の段階で、家康の人生を理解する難しさを感じたが、すごろくを通して、自分と比較しながら、自分なりに理解している姿がみられた。

子どもたちの変容として、学期毎に行うアンケートの中に、「自分が友人から認められていると思う」という項目が、1学期と2学期を比較して、平均が4.5→4.8(5点満点)に上昇している。他者に認められている感覚が高まっているということは、その他者がその子の気持ちを考え、受け入れているからと考えられ、本校の目指すやさしい子に近づいてきているのではないかと見える。